

たグループの一つである。昔ならこうした集団単位を「部族」と呼び、例えば「グリーンシ族」と呼んだところだが、最近では部族という表現に差別的な意味が込められるのを嫌って使われない傾向にある。

別に使ってもいいのだから、それなら「日本部族の首長である小泉純一郎」

も多数いるが、大陸中央部や北部のアボリジニの多くは、一九七〇年代以降の法的措置によって、土地権を保有している場合がある。土地権をもったアボリジニの村落を訪問するには、あらかじめ許可の申請が必要だ。

僕はグリーンシの人々が暮らす集落、ダグラグ村の入り



一九九七年の一月十日、僕は、その後長くつきあってゆくことになる、グリーンシの人々にはじめて出会った。

オーストラリア・アボリジニは、細かく分けると約六百の異なる言語集団からなる。グリーンシは、こうした

とか「新潟族の親族構造と交易文化圏」とか「ヨーロッパ連合における部族抗争の激化」といった表現も当然採用すべきだろう。いまさら「進歩史観」もあるまい。

都市に暮らすアボリジニ

## 社会の目網

# 権力の一極集中 見られず

グリーンシの人々がまず僕に要求したことは、言語の習得だった。ダグラグ村での標準語は、グリーンシ語と英語が交じり合ったクリオール(混成語)だ。老人は

と、しばらくして「ジャバラ」という名前を与えられた。

グリーンシ社会では、それぞれの固有名とは別に、皆



ダグラグ村にかかる虹

グリンシ語とクリオール語を話し、若者はクリオール語と英語を話している。言葉在必死に学んでいる

もう一つの名前をもつ。スキンネームは、男性に八種類、女性に八種類の合計十六種類に限定されている。「ジャバラ」は、こうした名前の一つだ。

通常、自分のスキンネームは、両親のスキンネームによって決まる。例えばジャバラはジュラムを父にもち、ナナクが母である。ニマラは僕の姉妹でナニリは僕の妻だ。するとどうなるか。ダグラグ村のすべてのジャバラは僕の兄弟であり、すべてのジュラムは僕の父だ。すべてのナニリは僕の妻となる。実際の妻はナニリの中から選ばれる。

こうして、社会全体が緊密な親族の網の目によって

例えはジャバラは、ナニリにはいろいろと要求できるが、ナニリの母であるナシガラには、話しかけることすら許されない。男女それぞれ八種類のスキンネームは、世代が変わることで循環するようになっているから、どの人物にも、必ず自分が要求する権利をもつスキンネームの集団があり、逆に自分が命令に従わなければならないスキンネームの集団がある。

結果として、どの集団も社会全体に対して絶対的な権威をもつことができない。中央集権的な政治機構をもたずに、社会運営が行われる。権力が一カ所に集中することがない、このアボリジニ独自の親族―政治システムは、長いあいだ、人類学者の関心を引いてきた。

これを国連で採用してみてもどうだろう、と思うのだが。

(歴史学者「新潟市出身」)

村許可を得た。「あなたがたの歴史と文化を学びたい」「そんなことを説明し、後は彼らのペースに身をゆだねた。」

言葉を必死に学んでいる

結びつく。興味深いのは、十六種類の名前のあいだで、相互依存的な権利と義務の関係が生まれる点である。

(火曜日掲載)